

意味がわかるとゾツとする話

## 3分後の恐怖

石段の子

107

人穴

101

四人ゲーム

95

船室

89

迎え火

83

影ふみ

77

## ひぐらしの夕暮れ

スズメバチ

35

パーテイション

29

たそがれの訪問者

23

タイムカプセル

17

9月の子

11

ボクの親友

5

あとがき

150

付録

137

貼り紙

131

落しもの

125

分けではいけない

119

入らずの森

113

空き地の男

71

移動教室

65

ひぐらしの夕暮れ

59

ソフビ人形

53

雨の駐車場

47

ピアノ

41



まだ赤ちゃんのボクと写っている子犬は、ルーク。

レトリバー犬だ。ルークはボクの親友。ずっと一緒に大きくなつた。

叱られたときや悲しいことがあったときは、ルークの首にギュッと手を回した。

「大丈夫ですよ」

ボクを励ますように、ルークは小さく鼻をならした。

ルークはとても賢くて、散歩のときも、ボクらを困らせるような行動はしなかつた。

ボクがまだ小さい頃は、ルークの散歩は家族の誰かと一緒にだつたけれど、小三になった頃には、いつもの散歩コースなら、ボクとルークだけで出かけていた。

川の土手を走つてから、河原におりて、ボール遊びをする。

遊び疲れた後、コンクリートの石段に、ボクとルークは座る。

夕日が川に反射してキラキラ光る様子を見るのが好きだった。

川沿いの遊歩道を通学の自転車が通る。ときどき、学校帰りの姉が自転車を止めて、ベルを鳴らした。

「いつまでも散歩しないで。ほら、帰るよ」

姉の声にボクもルークも立ち上がり、姉の自転車の後を走つて家に帰るのだった。

ルークの元気がなくなってきたのは、ボクが六年生になつた頃だ。

日曜日の朝、いつものように散歩に行こうとルークに声をかけた。

ルークはうれしそうに尻尾を振つて、立ち上がるのだが、また座り込んでしまつた。

「人間より、犬の方が年をとるのが早い」

父が教えてくれた。

「ルークはおじいちゃんだから、散歩もルークのペースでゆっくり歩いてあげて」

父は寂しそうな顔で、ルークを見ていた。

その夏は、とても暑かった。犬は暑さに弱い。

ルークも家の中の涼しい場所に、ケージを移した。

移動教室や水泳大会で、ボクは忙しかつた。別の中学に行く友だちと最後の夏休みで遊ぶこともあって、ルークの散歩も休みがちになつた。泊まりがけの移動教室に行く前の日。ボクは眠つているルークの頭をなでた。

「ごめんね。ルーク。移動教室から帰つてきたら、いっぱい遊ぼう」